

小樽運河と石造倉庫群の保存に関わる市民運動を通して小樽都心部の復興・再生に貢献した業績

峯山富美 殿 [小樽再生フォーラム顧問・元 小樽運河を守る会会長]

選定理由

峯山富美氏は、小樽運河の埋め立て問題が表面化した当初から、一人の主婦でありながら、小樽運河の小樽における重要性を深く認識し、小樽運河とその周辺の石造倉庫群の保存運動を一貫した姿勢で主導し、この運動に参加した多くの人々の精神的支柱となった。埋め立て問題が先鋭化しつつあった1978年に60歳で小樽運河を守る会の会長に就任し、埋め立て工事が進み始める1984年に辞任している。小樽運河問題が終結した後も、「運河は埋め立てられても運河を守ろうとする心は埋められぬ」との思いから、小樽再生フォーラムの結成に参加し、1987年顧問に就任した。官民の対立を超えた地域再生へ向けた協働の実現に尽力し、小樽市政と市民団体との建設的な関係構築に大いに貢献した。現在、93歳のご高齢であられる。

同氏が会長の任にあった間、27回にわたる小樽運河研究講座の連続的な運営や約10万人が参加した小樽ポートフェスティバルの開催、都市計画道路変更に関する対案の提出など、単なる反対運動にとどまらない創造的かつ建設的な小樽運河を守る運動が展開された。1979年には「第3回全国町並みゼミ」が小樽で、国会議員の参加による「小樽運河を考える集会」が東京で開催されている。一連の運動は、住民主体を基調としつつ、専門家や政治家などの支援を得て進められ、現場から学び発信し対案を提起するなどの特徴を有しており、今日のまちづくり活動へ大きな影響を与えている。

1985年に小樽運河の一部埋め立てによって拡幅された道道臨港線が完成した。当初の計画は、幅員40メートルの元来の運河をわずかに幅10メートルしか残さないというものであったが、保存運動の過程で計画は周辺環境や景観を重視したものとなり、結果的に幅約20メートルの運河が保存され、散策路などその後の小樽運河観光の目玉となる社会資本の整備が実現するに至った。また、歴史的建造物をリスト化し、保全措置を講ずるほか、面的な景観整備を行うために1983年に「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」が制定された。これは1992年に全面改訂され、「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」となっている。これらのまちづくりの成果として、小樽はいまや年間800万人が訪れる一大観光地として経済的にも繁栄しているのみならず、景観行政が広く行き渡り、良好な都市景観の達成が実現している。さらに、この運動を通じて、将来のまちづくりを担う多くの人材が育成されたことも大きな成果である。

運河の全面的な保存は達成できなかったが、このような今日の小樽都心部の再生に対して同氏が果たした役割には計り知れないものがある。2001年小樽で開催された第24回全国町並みゼミの基調報告で次のように述べている。「たしかに私どもは運河運動に負けたのです。でも私は負けたとは思いませんでした。それはなぜかというと、私たちは運河からこのまちを見直したからです」。また、同氏が1995年に上梓した本は『地域に生きる——小樽運河と共に』

と題している。先の言葉や「運河と共に」「生きる」といった書名のフレーズに、同氏のふるさとづくりへの熱い思いが表現されている。こうした思いは今も市民の共感を得るところであり、市民の間において同氏は敬愛され小樽を愛する市民の象徴として大切にされている。

一人の主婦が地域の文化的遺産の大切さに目を開き、長い保存運動の苦闘の末に、官民の協力体制を築きあげ、その成果として歴史文化の香る都市の再生が実現されている例は希有であり、日本建築学会がこうした業績を文化賞をもって称えることは誠にふさわしいものと確信する。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。

受賞所感

受賞ということなど考えたこともないので喫驚いたしました。初代会長事務局長降板で壊滅状態になり最後に残った一握りの市民と六十歳を超えた私とが決意を新たに立ち上りました。そこに協力を申し出た三人の若手研究者をシンクタンクに進めた運動でした。

小樽は保守の強い町、行政と経済界が道路促進で、行政は正しい手続きを経て大臣認可のうえ予算もつき倉庫破壊が始まったの運動でした。どだい無理なことでした。たび重ねての陳情要請もいつも不採可。でも私どもは根気よく手を緩めることなく訴え続けました。

なぜこうも強引に訴え続けたのか。それはこの倉庫と運河がこの町の最盛期を築いたからです。北のウォール街とたわれた銀行街もそのためにでき、当時道内の金融を牛耳りました。したがってこの場はこの町のシンボル、かけがえのない場であるからです。そのような場を今を生きているわれわれはなんとしても守らねばと考えました。まちは過去の人、現在の人、そして未来住む人の共同作品です。運河問題は結局中間的構想で決着しました。

私どもはこの運河を通してこの町の素晴らしさを確認しました。工学院一期生の方々の手による建築が現存しています。このまちの歴史の重み、深さに気付き驚きと誇りをもってこのまちに生きる喜びを共感し得たのです。そしてまた、このたびの受賞と重なる喜びに深い感謝を捧げます。賞は過去の業績に対するものでしょうが、後に続く人々の励みになるよう祈っております。



みねやま・ふみ

1914年生まれ/三菱商事、小樽市立北手宮小学校教員を経て、小樽運河保存運動にかかわり全国町並連盟設立と同時に参加。運河運動の終わりとともに小樽再生フォーラムを結成、今日に至る/著書に『地域に生きる——小樽運河と共に』/1998年国際ソロプチミスト奨励賞受賞